

「水五訓」に学ぶ



よしむら かずなり
吉村 和就

グローバルウォータージャパン代表
国連テクニカルアドバイザー
水の安全保障戦略機構技術普及委員長
日本水フォーラム理事

水五訓、水関係者に良く知られている言葉である。水の性質を介し、人の生き方、処世術を述べた言葉であり、多くの知識人や企業人により語りつがれてきた。人生訓として有名な言葉だが、原作者や原典が未だにはっきりしていない。世間で最も流布されている原作者の名前は、戦国時代、豊臣秀吉の知恵袋といわれた「黒田官兵衛」（黒田如水）である。王陽明や太田道灌らの名前も上げられている。では、まず「水五訓」の本文を見てみよう。

【水五訓】

- 一、自ら活動して他を動かさむるは水なり
- 二、常に己の進路を求めて止まざるは水なり
- 三、障害（障碍）にあい激しくその勢力を百倍し得るは水なり
- 四、自ら潔うして他の汚れを洗い清濁併せ容るるの量あるは水なり
- 五、洋々として大洋（大海）を充たし発して蒸気となり雲となり雨となり雪と変じ

霰（あられ）と化し凝しては玲瓏（れいろう）たる鏡となりたえる、而（しこうして）も、その性を失わざるは水なり
現代風に意識すると

- 一、自ら動いて模範を示すことにより、周囲の人々を牽引しよう
- 二、常に流れを止めることなく、信じた道を求めて働き続けよう
- 三、障害や壁があっても、その間に力を蓄えることで、これからの困難を乗り越えよう
- 四、水は汚れを浄化する性質を有している。相手の汚れやけがれを浄化できる容量の大きい人でありたい。
- 五、水のように与えられた環境の中で、いかに柔軟に変化し成長することが大切である。（蒸気↓雲↓雨↓雪↓霞↓鏡面）
なるほど、特に中小企業の事務所に掲げられているケースが多いことが理解できる。水の性質を介し、人の生き方、物事への取り組み姿勢を人生訓として明記している文である。
では、だれが原作者か。多くの説が蔓延しているが、いくつかの調査例を紹介する。

一、国立国会図書館からレファレンス事例の回答

回答…「水五訓」、「水五教」、「水五則」などの言葉でしばしば全国から同じ質問が寄せられます。黒田如水、王陽明説などがありました。いずれの手掛かりなし、当方で回答不能だった事例です。（2013年2月14日14時25分掲示）

二・門脇敏明氏（元日本水道新聞社社長）の「水を語る会」への寄稿より

水の持つ性質を捉えた人生訓として水道界で広く知られている「水五訓」、「水五則」、「水徳五訓」。その作者として、黒田官兵衛、太田道灌、王陽明、老子等々といわれているが、残念なことに判明していない。（2011年11月5日）

三・筆者が思うには……老子・荘子が元祖？

水五訓は中国の古典から影響を受け、その考え方が時の権力者や学者が綿々と都合良く継承してきたものの集まりと考えるのが妥当である。「歴史」とは生き残った強いものが造り、「ことわざや教訓」は時の権力者や有名人が残すのは古今東西の共通認識である。では筆者が触れ合った「水五訓」を紹介する。

・貴船神社の水五訓

2015年12月 世界工学会議（WEC2015）が国立京都国際会館で開催され、筆者は水セツシヨンの座長を務めたあと、京都市左京区にある水の神様で有名な貴船神社を訪ねた。全国に四百五十社あると言われる貴船神社の総本社である京都で開催された第三回世界水フォーラム（2003年3月）では貴船神社の宮司・高井和大氏が「日本人と水への思い」を講演した。高井宮司は「みず」という言葉について「世界中で日本語だけに独特の表現がある」とし、次の例を紹介した。「みずみずしい」、「みずのしたたるような」、「みず際立った」というような表現は他の国では言い表す言葉がない。「みずみずしい」は漢字では「瑞々しい」と書く

が、この瑞と言う字は、もとの中国語では宝石の美しさを示す語だという。つまり中国人が宝石に見た美しさを、日本人は水に見たということになる。さらに高井宮司は「日本人にとり、水は単なるウォーターではなかった。一滴の水さえも神様からの贈り物であり、その水には生命力、気力をよみがえらせる不思議な力があると信じてきたのである」と。最前列で聴講していた筆者は宮司の言葉に深く感動した覚えがある。さて現場に戻ろう。赤い灯笼に囲まれた参道の長い石段を上り詰ると左側に「水占い」のみくじ売り場があり、その横に「神水」（水五訓）の立札がある。多くの男女がみくじを、神水の池に浮かべ、その運勢を占っていた。頂いたパンフレットには「貴船」は「きぶね」ではなく「きふね」である。決して濁ってはいけなさと、さすが水の神様である。

・静岡／柿田川公園の水五訓

ご承知のように柿田川湧水郡は名水百選にも選ばれる名水で、その湧水量は日量七十万トンから百万トンとも言われ東洋一の規模を誇っている。もちろん富士山からの湧水で特に透明度が高い。また全長わずか一・二キロメートルしかない一級河川で長良川と四万十川とともに日本三大清流に数えられている。公園内の「水五訓」の看板に書かれている文は少し異なっている。例えば、元の文章では「その勢力を百倍し」となっているが、柿田川水五訓では「その勢力を倍加し」であり、百倍ではなく、二倍である。また最後の文では「蒸気」や「鏡」という表現が無くなっている。このように全国には多くの「水五訓」の看板や石碑があるが、表現や順番が微妙に異なっている例も多い。

四・中国の古典から

では水五訓の参考文献として老子と荘子に学んでみよう。

(一) 老子の道徳経八章より

・「上善如水」

あまりにも有名な言葉である。「上善は水の如し」、上善とは、「最も理想的な生き方を願うならば、水の在り方に学べ」ということである。水には学ぶに足る三つの特徴がある。第一に、柔軟である。四角な器に入れば四角になり、丸い器に入れば丸くなる、どんなに器を変えてもそれなりに形を変え、逆らうことがない。第二に、水は低いところ、低いところに流れてゆく。しかもその間に多くの植物や生態系に分け隔てなく自分（水）を与えながら、低いところを求めて移動している。低いところに身を置くのは人間、誰でも嫌がるが、水は最も低いところに留まり、しかも謙虚である。第三に、ものすごい能力を秘めているが、自分の能力や地位を誇ろうともしない。急流は岩を砕いて破壊し、逆に水の一滴は百年で岩をも穿つ能力を持っている。このように水は「柔軟、謙虚、秘めたるエネルギー」を有している。

老子は、人間もそれらを身につけることが出来れば、理想の生き方に近づけるのだという。最高の善とは無為になすものであり、「俺は善をおこなっているんだ」という意識を持つこと無く、自然のままの行いが即ち「善」である。「如水」単独

では、流れる水の如くすら物事が運ぶ様や、流れに逆らわずに素直に従うという意味でもよく使われている。

また、老子は「水の性質を用い人の生き方」を多く語っている。道徳経の中では、水が関係する表現が多く見出される。

- ・淵のように深く考えよ（第四章）
- ・水のような静かな姿（第四章）
- ・手に持つ器に水を満たし、こぼすまいと心配するくらいなら、初めから満杯にすることはしないのだ（第九章）
- ・土地が人の嫌がる低い窪地であれば、かえって水が満ちる（第二十二章）
- ・にわか雨が一日中降り続けることはない（第二十三章）
- ・世の中で最も軟らかいもの（水）が、最も硬いもの（岩）を制圧している。（第四十三章）
- ・大河や大海は、いかにして峡谷・河川の王となるのであろうか。それは己をよく低きに保つからである。（第六十六章）
- ・水より弱々しいものはない。しかしどんな硬いものに打ち勝つ水より優れているものはない。（第七十八章）

水五訓

水五訓の作者は不詳だが、水の特性を見事に捉えた「水五訓」は我々の「人生訓」としてこれからも人々の心の中に生き続けるであらう。